

朝鶯

鶯のなく初聲に夢さめてこゝろうれしきあさほらけかな

夕鶯

くるゝまで庭にさへづる鶯はながき春日もあかすやあるらむ

行路鶯

野も山も春になるらし玉梓の道のまに／＼うぐひすのなく

鶯馴

鶯は里なれにけり窓の戸をあくるおとにもおどろかぬまで

柳間鶯

浅みどり柳の枝にうつりきてなく鶯やのどけかるらむ

折にふれて

わが庭のしだり柳のかげふかみねぐらしめても鶯のなく

雪中若菜

うらく／＼とかすむ垣根をみわたせば竹の林にうぐひすのなく

松下残雪

はつ若菜人のつみけむあとばかり雪きえにけり野邊の通ひ路

山残雪

下かげに雪ものこりて吹きおろす松風さむし岡ごえの道

谷残雪

いまもなほふりやそふらむ北山の雪のけしきは冬にかはらず

三吉野のよし野の山は雪白し花まつ春になりけるものを
春雨のふりしのちまで残りけり谷の岩根につもるしら雪

山路残雪

巖をるころになりぬとおもひしをまだ雪ふかし山かげのみち

山家残雪

白雪のきえし垣根もなかりけり山にはいまだ春や來ざらむ

餘寒

大空はまたも雪けになりにけりいつかは花のふゝみそむべき

餘寒風

さえかへる春のあらしは深雪ふる冬にまさりて身にぞしみける

餘寒霜

咲きみてる梅の木かげに霜みえて春なほさむし山本のさと

餘寒雪

萌えいでし二葉の小草さむからむみえずなるまで霜のふれゝば

氷解

春寒き年としられてふる雪もおもひのほかにつもりけるかな

氷解

花をまつ梢にけさは泡雪のふりかゝるまでさえかへりけり

春風解氷

山川の氷ながるゝおとすなり春のいたらぬ方やなからむ

春雪

いろくづもうれしといまかうかぶらむ池の氷はとけそめにけり

春雪

あさひかけさゝぬ水際もうす氷うちとけそめて春風ぞ吹く
ふるがうちにかつ消えはてゝあわ雪は梅の花にもさはらざりけり

春雪

梅見にもおもひたゝむと思ひしをまたさえかへりあわ雪のふる

初春梅

花はまだにはほぬ梅の木のもとにたちいでゝみる春はきにけり

尋梅

道とほくおもひしものをいとはやも梅の林にわれは來にけり

立春梅

立つ春のあさひをうけてわが庭の梅のほつ枝もゑみそめにけり

梅始開

梅の花さきそめしより風さむきあしたも庭にいでゝこそ見れ

雪中梅

さかりにもならむとしたる梅が枝にまた白雪のふりかゝりけり

霞中梅花

なつかしき梅が香すなり窓の戸のかすみはてたる春のあしたに

窓前梅

文机の塵はらはむと窓の戸をあくれば梅の花の香ぞする

梅有遅速

とき遅きかけこそみゆれ梅の花おなじ春日のひかりうくれど

散るもあり蕾もありてゆきかへりみれどもあかぬ梅の花ぞの

やまざとののきばの梅はさきにけり算の水はまだこほれども

山家梅

山里も梅のさかりになりにけり都の春やさかりなるらむ

罽中見梅

故郷の春はさかりになりぬらむ旅寢のやどの梅さきにけり

田家梅

わら筵しきたるしづが袖垣も梅のかをりになれる春かな

若木梅

植ゑそへし若木の梅のうれしくも去年より花のさきまさりけり

水邊梅

あさ氷とけてながるゝ川岸にさゝなみよせて梅さきにけり

故郷梅

植ゑおきしひと木の梅の花のみは春になりけり故郷の庭

折梅

てすさびにひと枝をりぬ梅の花にほふ林をゆきかへりして

手折らむとおもひてみれば梅の花つほみもいまだすくなかりけり

梅香何方

目にみえぬ風をたよりにうめの花かをる木かけを尋ねけるかな

翫梅花

梅の花さきそめしより大方の人のこゝろも春になりけり

朝梅

朝霞にほへる庭のこのまよりあらはれそめぬ梅のひとつと

夕梅

夕風のさむき垣根にひとりのみかをれる梅のいとほしきかな

梅盛

風さむきあしたもあれど梅の花さきのこりたる方なかりけり

梅遠薰

ふみわけしわれを送りて梅の花とほさかるまでかをり來ぬらむ

遠村梅

山もとの里も春にやなりぬらむ霞がくれに梅のはな見ゆ

早春柳

朝霜のとくるしづくも寒からず柳の枝はまだ萌えねども

遠村柳

青柳のもえしなるらむうち渡すさとの垣根のくらく見ゆるは

水邊柳

水際にはつのぐむあしも見えそめて澤邊の柳春風ぞ吹く

草漸青

たらいでゝみるたびごとに若草のみどり深くぞなりまさりける

野春風

つゝなさく野邊のなか道あさゆけば露もこほれて春風ぞふく

春海

櫻だひつりする海人がこゑばかりかすみのにこの春の海原

夢

岩づたひ人こそあされわたつみの潮干狩せむ時や來ぬらむ

春野

春の夜はまださむけれどさく花のかけにあそべる夢をみしかな

春野

こゝかしこ花咲きにけり野邊ひろみ枯木もまれに思ひしものを

春野

子らはみな野邊の遊びにいでにけり萌えし小草は少けれども

春駒

親のあとしたふなるらむ若駒のひとり遠くあそばざりけり

春蝶

若草の露あたゝかになりぬらし野邊に胡蝶のあそびそめたる

春眠不覺曉

曉に夜はなりぬともしらざりき春のねぶりのさめがたくして

春夕

入相のかねのひゞきはきこえてもさびしからぬは春の夕ぐれ

春旅

をちこちの野山の櫻みつゝゆくはるの旅路ぞたのしかりける

春湖

すはの海の氷もいまはとけぬらしかすみわたれる信濃路の山

雲雀

あくがるゝ人のこゝろを久方の空にさそひてたつひばりかな

雲雀

うらくゝとかすみわたれる春の野にそこともいはず雲雀なくなり

雲雀揚

遠近にあがるひばりのこゑすなりうかれごゝろは人ばかりかは

野雲雀

春の野のかすみはいまだくられどあがる雲雀の聲のきこゆる

歸雁遙

歸雁離々

深山蔵

樵路蔵

雉子

雉思子

池蓮

寒松風

爐邊述懷

待春

早梅

待春

早梅

いづくよりたちしなるらむかへる鴈とほざかりでも聲のきこゆる

うちつれて渡りし友にあらざらむはなれなくにかへるかりがね

三吉野のみすゞが下の早蔵もしづに折られて世にいでにけり

やすらひしひまにやしづが折りつらむ眞柴にそへし春の早蔵

朝霞たなびきわたる春の野の小松がはらにきとす鳴くなり

狩人はたゝすなりにし春の野に子をおもふ雉子のけさも鳴くなり

子をおもふ焼野の雉子は春の夜の夢もやすくはむすばざるらむ

白鷺のおりたつ方もみえぬまで池の蓮葉しけりあひにけり

大空の雲をしのける山松の枝ふきしをるこがらしのかぜ

ふくる夜の霜ふむ人もあるものを火桶にのみやよりあかすべき

春たゝむ日はまだ遠しはやざきの梅の梢はふゝみたれども

梅の花さけるを見ればふる雪に冬ごもる身のはづかしきかな

折早梅

神祇

道

寄道述懷

寄屋祝

雲

親

思往事

鶴

雪中鶴

雀

鯨

埋火のもとにさゝむと折りにけり雪をしのぎし梅のはつ花

くもりなき人の心を千早振かみはさやかにてらしみるらむ

たてつめし市の家居のうちにはさへ道やあるらむ人のかよへる

天つ神ひらきましけむわが國の道にはまどふ人なかりけり

くもりなき世をまもるらむ大空につらなる星のかげさやかにて

久方の空にたゞよふ村雲もやまの木立ややどりなるらむ

すぐよかに家をも身をも修めつゝ老いたる親の心やすめよ

おもほえず夜をふかしけり國のためたふれし人のものがたりして

百鳥の中にまじりてあされどもたづの姿はゆたかなりけり

雪はれて月さしわたる松原に子をおもふ田鶴のこゑのきこゆる

わらはべに追はれしならむ群雀あわたゞしくも鳴きかはすなり

汐煙たつといふなりとほつ人松浦の沖にくぢらよるらし

籠中鳥

墨

車

筆

玉

埋木

披書知昔

竹

松

故郷庭草

草

寄水述懷

おもしろくさへづる鳥ぞあはれなる伏籠の中をおのが世にして
 うるはしき筆の林になびかずば松の煙もかをらざらまし
 人の手にひかする車つくりけむ駒のかよはぬ道ゆかむとて
 心してとりにし筆の命毛のあとこそ残れながき世までに
 疵なしといはれむ玉をひろはむと詞の海にたぬ日もなし
 水底にしづみはてたる埋木もあらはれぬべき時やまつらむ
 あらはし書教へとなしにけりむかしの人のこゑはきかねど
 窓の戸をあけてくれ見れどあかれぬはなほかる竹の姿なりけり
 白雲をしのがむ山の松原は若木なれどもこだかかりけり
 むかしわがあつめし草の根はたえて浅茅むぐらのしける庭かな
 種なくてひとり生ふるは空蟬の人のこゝろのもの忘れぐさ
 世はいかにくだりゆくとも河水のにごらざらなむ人のこゝろは

田家水

海外旅

旅宿曉

曉

旅

送別宴

旅宿

船中見島

幾家

富士山

雨後山

關

しづの女が朝菜あらひしあとながら田川の水はにごらざりけり
 白雲のめぐりくゞてさまぐの國の姿もみてかへらなむ
 小車のおとぞきこゆる旅やかたあけぬにいづる人やあるらむ
 おのづから眠りさめたる曉のしづ心には似るときぞなき
 旅にあれば物もおもはずこゝかしこかはるけしきに心うつりて
 盃をかたみにあけて旅にいづる人の門出を祝ひけるかな
 いなづまをひきし火影もみゆるかなあがたの里も年にひらけて
 さきにみし島はうしろになりにけり我がのる舟の早さしられて
 假庵をかるくつくりてしづの男はいたる所に身をつくすらむ
 ふじのねの見えそめしこそうれしけれ都をさしてかへる旅路に
 足曳の山のはうすくあらはれぬひごろの雨やはれわたるらむ
 逢坂の關のいはかどもる人のなき世となりて年もへにけり

山家眺望

わが山のむかひの高嶺くもはれてあらはれにけり松のむらたち

樵夫

柴人は身をかるけにも登りけりふみわけがたくおもふ山路を

朝海

波の上に朝日にほひてかゞみなす青海原はあけはてにけり

漁夫

こぎかへる小舟をみれば小島にも蟹が苫屋や多くあるらむ

深夜燈

ねざめしてみれば枕のもととてらす燈火くらし夜やふけぬらむ

窓燈

高殿の窓にかゝぐるともしびは月なきよこそさやかなりけれ

煙

朝けぶりたちそふ末にしられけり民のなりはひ進みゆく世も

民戸煙

いぶせくも煙ぞなびくかなぢゆく車の窓をさせといふまに

折にふれて

いとなみはその家々にかはるらむたつる煙はひとつなれども

折にふれて

おのがみをかへりみてのちよの人のよきもあしきもいふべかりけり

國民の詞の花をわが窓につどへてみるがたのしかりけり

明治四十三年

蟬聲滿耳

かたはらの人のいふこと聞きとれず蟬の聲のみ耳にひゞきて

旅夕立

旅人を野邊にのこして夕立は高嶺はるかにこえてけるかな

瞿麥露

はらはすばおもはぬかたにかたぶかむ露おきあまるなでしこの花

川梅雨

さみだれにつゝみを水やこえぬらむ舟にてかよふ川つらの里

川邊梅雨

さみだれに水のあふれてものをみなふねにてはこぶ川つらのさと

雨中郭公

夏山の若葉なびきてふる雨のすゝしき暮になくほとゝぎす

郭公稀

たまさかにきなけばこそはほとゝぎすあまたの人にめでられにけれ

故郷橋

たらちねのみ親の御代のふるごとを思ひぞいづる庭のたちばな

蓮露

長くなりまどかになりてはちす葉にまるぶもすゝし露の白玉

夏舟

ひざかりにこぎつらねゆく川船は泳ぎにいづる子等やのるらむ

夏雨

荒金の土さへさくる日ざかりにあな心地よやいまの村雨

夏車

さまざまの重荷をつみて日にやけしいさごの上を車ひくなり

秋寢覺

秋のよのねざめしづかにおもふこと國とたみとのふたつなりけり

親

村肝の心つくしてむくいなむおほしたてたる親のめぐみに

友

あやまちをいさめかはして國のため力をつくせ益荒雄のとも

老人

老の波かつぐにつけて思ふらむ浮きつ沈みつ渡り來し世を

杖

竹馬にのるわらはべよ老の坂こえゆくおやのつゑとならなむ

寄國祝

千萬の民の心のそろふこそ國のさかゆくもとるなりけれ

寄世祝

神代よりうけつぎし世はうみのこの末のすゑまでさかえゆくらむ

瓦

なにがしの寺の文字ある古がはら玉にならべてかざりけるかな

寄松述懷

千歳にはあえずともよし常磐なる松の操にならひてしがな

蘆間鶴

巢立ちにし雛あさらせて一つがひたづぞおりたつ浦のあし原

澗底古松

世の中の嵐をしらぬ谷底の松はしづかに千代を經ぬべし

田家夕

あけまきも牛ひきつれてかへり來ぬ夕けの煙みゆるわら家に

折にふれて

ことなくてをさまる世にも民のため思ふ心はやすむ時なし

何事も思ふがまゝにならざるがかへりて人の身のためにして
花になり實になるみれば草も木もなべてつとめのある世なりけり

明治四十四年

山路落花

散る花のふゞきもさむき夕かな苔の露ふむやましたのみち

蟬聲滿耳

耳ちかくなきたつ蟬にやり水のすゞしきおとも聞えざりけり

川夕立

水上や夕立しけむ谷川のながれみなぎる音きこゆなり

夏夜

ふくるまで涼みすごして夏の夜はねやに入るまも短かりけり

高樓夏月

大ぞらの風をさそひて高殿の窓にさしいる月のすゞしさ

夏風

わが庭の松をふきこす朝風にねぶりもさめて涼しかりけり

夏月易明

今しばしすゝまほしく思ふともしらでや月のかたぶきぬらむ

樹陰夏月

吹く風もすゝしき杜の木の間より光をもらす月のかげかな

對月待秋

蟲の聲きかむ秋こそまたれれすゝしき月の影にむかひて

望遠帆

追手にやふきかはりけむ和田の原おきの白帆のとほざかりゆく

述懐

ちよろづの民の心もをさまらむ誠ひとつをもて教へなば

國

いかに世はひらけゆくとも古の國のおきてはたがへざらなむ

老人

雪にたへあらしにたへて末遠きよはひをたもて峰の老松

旅行友

及ばぬをたすけあひつゝおもふ友おなじ學びの旅にいづらむ

心

おもふにはまかせずとも人心たひらかにこそあらまほしけれ

手習

進むべき筆さきしるし幼児が手習ふ文字はつたなけれども

書

心なくかきながしたる水莖のあととはづかしく思はるゝかな

家

親も子もしたしみかはし家の内のにぎはへるこそよはたのしけれ

柱

眞木柱たちさかゆるもうごきな家のあるじのあればなりけり

塵

塵の世に身はまじるとも人みな的心はつねにはらひきよめよ

河水流清

いすゞ川きよき流れのすゑくみて心をあらへ秋つしまびと

窓前竹

わらはべが學びの窓のくれ竹のとしくしけくなるぞうれしき

柚木

わたらひの宮木とならむ柚山は若木のかげもこだかからむ

にふれて

石上ふることぶみは敷島のやまことばのしをりなりけり

現身の人の心のおこたりにまされる仇はあらじとぞおもふ

さまたぐる何はありともおもひいる道にまよふな益荒雄の友

廣き世にまじはりながらいかなればせばきは人の心なるらむ

及ばざる事なおもひそうつせみの身はほどくのありけるものを

おこなはむ時にあたりて迷ふその人の心をしくもあるかな

年代不詳

折にふれて 立ちかへる年の光をためしにてみちあるみよの國はうごかじ
 野初春 むさし野は雪も消なくに朝霞たなびきにけり春のしるしに
 雪後春雨 消えのこる軒端の雪もとけぬらむふる春雨のおとのどかなり
 鶯聲和琴 玉琴のねにひかれきてうぐひすもをすの戸ちかく聲あはすらむ
 鶯 まどちかき竹のさえだに鶯のはつねのふしをきくぞのどけき

右明治神宮寶物殿にて拜寫

谷鶯 奥山のたにのうぐひすいで、なけ都の梅はいまさかりなり
 河邊鶯 川岸の柳のいとのがき日をこづたひくらすうぐひすのこゑ
 月照殘雪 さいえのこる松の木かけの白雪にさすかけさむし在明の月
 梅香薰袖 春風のさそふとおもひし梅が香のうれしく袖にとまりけるかな

翫梅 たちよりて折らむとおもふ庭のおもの梅の梢にうぐひすのなく
 雨中苗代 ふる雨にをがさとりくしづの男が水口まもる小田の苗代
 山路春雨 くれぬとて山路をいそぐ旅人のそでしづかにも春雨ぞふる
 川邊春月 玉川のきよき流にやどりてもなほおほるなる春の夜の月
 花盛 駒なべてゆく人おほしたが里もはなのさかりになりやしつらむ
 霞中花 山ざくらにほふあたりに朝なくたなびきわたる春霞かな
 磯邊花 あるいはその松の木かけに汐風をよきても咲ける山ざくらかな
 風前花 春風のふきのまにくちりくるはいづこの庭のさくらなるらむ
 浦落花 きのふけふ春もふけひの浦風に波路をかけて散るさくらかな
 月前落花 あかつきの月こそくもれ山櫻こするにのこる花やちるらむ
 遅櫻 奥山の青葉がくれの遅ざくら春におくれしいろとしもなし
 岡雉子 わらび折る人もかへりし片岡にききすなくなり春の夕ぐれ

瀧邊藤花

こだかくもしけれ松をつたひきて瀧つ岩根にかゝる藤波

松上藤

老松の枝にかゝりて咲きにけりわかむらさきのふぢなみの花

海邊首夏

若葉さす磯山かけにうちよする波のおとすし夏やきぬらむ

夢後時鳥

ほとゝぎす鳴く一聲のうれしさにいま見しゆめを忘れけるかな

月前時鳥

この夕むらくもはれてほとゝぎす涼しき月のかけになくなり

夏山家尋人

夏山の草のいほりをとふ人は卯の花垣やしるべなるらむ

蟬

水無月のてる日のかけはさしながら時雨にまがふ蟬のこゑかな

首夏朝

ぬぎかへし袂にかよふ朝風のうらめつらしき夏は來にけり

橋

窓ちかく花たちばなはかをれども山ほとゝぎすいまだきなかず

海邊夏

伊勢の海のきよきなぎさにうちよする波の音こそ涼しかりけれ

川鮎

玉川のはやきながれのそこすみてさばしる鮎のかずも見えつゝ

夏池

宵にみし螢はきて赤星のかけこそうつれ池水のうへに

月

月かけのいたらぬ里はなけれどもながむる人のこゝろにぞすむ

田家時雨

かりのこす山田のおくてうちなびきさむき嵐にしぐれふるなり

氷満池上

池水はこほらぬ方もなかりけりいづこか鴛鴦の夜床なるらむ

濱千鳥

汐風をつばさにうけて冬の夜の長濱つたひ千鳥なくなり

庭落葉

木枯の吹くたびごとにちりつもる庭の落葉は幾重なるらむ

江寒蘆

難波江のあしの枯葉におく霜のふかくも冬のなりにけるかな

蘆間薄氷

霜がれのあしの葉さやぎ吹く風にむすびそめたるうす氷かな

池水鳥

さゆる夜の月の光に池水のみぎはの鴨のかずも見えつゝ

氷留水聲

山川のみづは氷のとぢはてゝ風の音のみたかきころかな

鷹狩雪

ふる雪の白斑の鷹を手にするて朝狩きそふ冬は來にけり

山家雪

山里の軒のかけひの音はして雪しづかなるあさほらけかな

船中雪

漕ぎいでゝ船の中より見渡せばゆきおもしろし浦の松原

霰 山風にふきおろされて今日もまたふもとの里はあられふるなり
 寒夜風 窓の戸をたく嵐のおとさむし池のこほりもいまかとづらむ
 池水厚 風さわぐ池のみぎはのあつ氷なみのすがたにむすびけるかな
 折にふれて ふる雪を袖にはらひて臣どもと馬はしらするけふのたのしさ
 曉千鳥 磯崎のなみまに月のかげ落ちてあかつき寒く千鳥なくなり
 折にふれて 駒にのるわざはいくばく進むともつまづくことをかへりみよかし
 逢友述志 きのふけふながきはる日に我と臣とむかしのふみのものがたりして
 右明治神宮寶物殿にて拜寫

附録

○ この春は梅うぐひすも忘れけり民やすかれと思ふばかりに
 皇太后の宮京都行啓のなりに
 うぐひすもころとくひらけ長閑なるみなみの園の梅の色香に

水鳥群

あし鴨のむれて浮べる池の面はつばさの風になみやたつらむ

龍驤艦に召して海路御西巡の折鳥羽港にて

○ 浦風もあら磯波もけさなぎて鷗とびかふ鳥羽のうなつら

東北御巡幸の折陸奥國二戸郡小繫の關にて

○ 住む人は花の都とおもへどもつゆのいのちを小繫のさと

日盛りは筆とることもものうくて扇をのみぞ手ならしにける

○ 曇りなき神の心はとことにはに八咫の鏡にうつりますらむ

子を思ふよはの鴉のいねがてにあくる遅しとなきわたるらむ

○ 雨だりにくほみし石もあるものを貫きとほせ大和魂

しばらくはとこほりてもつらぬくは人の心のまことなりけり

○ 千萬の神のみたまはとこしへにわが國民をまもりますらむ

言の葉の上にはほひてゆかしきは人のこゝろの花にぞありける

歌

○
 いはがねもくたく心にひきかへて花をもをしむ大和魂
 庭つ鳥つけぬさきにとおもひしはまだよひのまの心なりけり
 臣どもをあつめてこよひ筆とりて文字のかすく／＼かきて見せける
 炭がまにかよふ山かつさむからむあさ霧ふかし小野のやまみち
 埋火によりそひてやはくらすべき思ひおこさむ事もある世に
 折にふれて
 世の中の人の鏡となるひとはうごかぬ國のしづめなりけり
 千早ぶる神にむかひて恥ぢざらむ心のそこのにござりせば
 つはものとともに勇みてすゝむてふ駒のこゝろも人におくれじ
 吳竹のおきふしごとにおもふかな人の心のなほからむ世を

明治天皇御製集 終

明治天皇御製集



大正十五年十一月廿五日印刷
大正十五年十二月一日發行

定價金壹圓

編輯兼 東京市牛込區天神町八十二番地

發行者 岩 永 淳 太 郎

印刷者 東京市牛込區天神町八十二番地

印刷所 渡 邊 源 藏

東京市牛込區天神町八十二番地

印刷所 山 口 印 刷 所

發行所

東京市牛込區天神町八十二番地
振替東京五五〇七四番

淳風書院

550

148

終